

中島に対して北村は表出作用が後から発達したように捉える必要があるのかと異議を提出し、黒田は中島発表とは逆に始めから自己と他人がいてコミュニケーションがあるのではないかと主張する。それに対して中島は脳損傷患者の例を用いて、表出機能としての指示機能が把握機能より後に発達すると答えた。また言語系を、一次機能を基盤として成り立つ二次機能として捉える立場を表明した。だが、時間がなくて北村、黒田との間の議論を十分に発展させることができなかった。

川中に対しては、始めに情動の意味についての質問があった。ここではemotionというよりfeelingという意味で使っていると答られた。田畑はRogers理論においては経験とexperiencingとの統一をはかるところに自我構造の働きがあり、happyかunhappyかの感情があるとの意見をのべた。他の人から認知、体験、経験などの用語は皆同じようなものではないかとの意見が出され、川中も本質的には余り違いがないとの意見をのべた。なお、この時点で、すでに規定の時間を30分ほど超過していたので、一応論を打ち切った。

黒田に対しては討議時間内の意見交換ができなかったので発表時間中の質問と討議時間終了後の説明会から要約する。この図式をどう使うかという点について質問が多く出た。女性にも使えるのかとか、発生的解明が可能といわれたがそれはどうするとよいのかとか、黒田の体系との関係はどうなのかとか沢山の質問が出された。答としては、これは治療者がどのような理論をもっているかというものであり、経過を追うためにも診断のためにも使えるものであるとのことだった。スライドを使っての説明会には残って傾聴している人がかなりいた。

II ま と め

方法論におけるこの部会の中島の発表を除いては、みな心理治療に関係の深い研究者あるいはテーマであったといえる。そのため何らかの意味で段階区分と共に変化とか発達に関連する議論が多かったようである。理論的には垂直方向から迫る上田の試み、横断的(切株構造的、黒田)に接近する牟田の試み、川中の自我に関してロジャースらの研究を踏まえたオーソドックスな試みなどがあり、その心理治療(あるいは教育活動)の具体的実践的過程や診断結果を記述する方法としては黒田の研究が位置づけられる。北村は過去経験に対して個人がそれを主体的に意味づける仕方の重要性に注目する。これもやはり変化と発達に関する。中島の研究は言語行動の発達を一般心理学的静的な方法で追求するものである。これは従来の心理学とのつながりを確認してゆく上で重要な位置をしめる研究である。筒井の研究は心理治療を科学化する上で、従来の科学論の再検討と変革を要請する意図を秘めているものである。

以上の討論を振り返ってみて感ずるのは、変化を導く要因としての“人格と人間関係”に言及がなされつつも(田畑の指摘)、それがまだ全討論者の共通に理解するところとなっていなかったということである。討論者らの多くが立っていた科学的基盤はまだ従来の近代科学であり、科学は実践的なものではなく、価値とは無関係な中立的なものであるという科学観だったと思われる。この科学観を真の意味で克服してゆくことが、この方法論の部会の今後の課題と思われる。

(川中 勝・筒井健雄)

発 達 (201~209)

- | | | |
|--------------------------------------|---------------------------|---------------|
| 座長 末 利 博・宮 崎 正 明 | 比治山女子短期大学 | ○宮 崎 正 明 |
| 201 特定の事例の持つパターンが、法則の学習・記憶に及ぼす効果について | 広島大学 | 富 永 大 介 |
| 東北大学 立 木 徹 | 広島大学 | 森 敏 昭 |
| 202 幼児における記憶過程の発達的研究 | 205 幼児における記憶の体制化過程の分析 (4) | 広島大学 ○富 永 大 介 |
| 広島大学 松 村 ひろ子 | 広島大学 | 森 敏 昭 |
| 203 幼児の記憶の体制化における記銘時の手掛りの効果 | 比治山女子短期大学 | 宮 崎 正 明 |
| 奈良教育大学 藤 田 正 | 206 幼児における記憶の体制化過程の分析 (5) | 広島大学 ○森 敏 昭 |
| 204 幼児における記憶の体制化過程の分析 (3) | 比治山女子短期大学 | 宮 崎 正 明 |

- 広島大学 富永大介
 207 児童の心身発達に関する追跡研究 (9)
 —未熟児についての縦断分析—
 愛知教育大学 堀端孝治
 208 幼稚園児における全身運動能力の発達
 —10年にわたる継続的測定による—
 東京家政大学 ○山下俊郎
 附属みどりヶ丘幼稚園 川崎千東
 東京家政大学 川合貞子
 209 スポーツ適正の発達に関する研究 (III)
 —緩衝能について—
 京都教育大学 末利博

I 発表と討論の経過

この部会での発表内容は、201～206までが幼児の記憶に関する研究、207～209までは身体及び運動能力の発達に関する研究であった。発表は一課題について15分あてで順次進められたが、204～106の一連の研究では一括して発表及び質疑応答がなされた。いずれの研究に対しても活発な討論が展開された。

立木(201)は特定の事例の持つパターンが、法則の学習・記憶に及ぼす効果について検討した。この研究に対して森(広大)よりこの研究は色と数を結びつける対連合学習に受けとめられる。法則の学習とするならば、もっと適切な課題を用いるべきではないかという意見があり、立木はここでの法則は各々独立しており先行経験と干渉がない点では指摘される通りである。今後は法則間の相互関係を取りあげて検討していきたいと答えた。杉村(奈教大)は法則の記憶と事例の記憶との関係について質問した。これに対してマトリックスを作ればわかるが今のところ関係があるかどうかかわからないと説明した。大島(美作女大)は「既知のパターンを見せるか、初めてのパターンを見せるか」によって結果がちがうというデザインなのかそれとも「何か絵を見てやったのとやらなかったのとのちがい」を見たデザインなのかという質問をしたが、回答は明確ではなかった。

松村(202)は幼児を用いて意図的な記憶が生じる時期と系列記憶課題においても分化仮説が妥当するか否かを検討した。森は第一に系列記憶課題を用いた積極的理由は何か。第二にL条件では偶発学習であるが内省報告で記憶の意図があったか否か聞かなかったという質問をした。第一の質問に対しては前回の研究との関係を見るために用いたと回答し、第二の質問に対しては小学生には聞いたが年少児は聞いても完全に答えてくれないので聞かなかったと説明があった。杉村は

訓練の転移効果をみる実験かという質問をした。これに対して訓練というよりは課題を的確に把握してもらうための実験であるという回答がなされた。この回答に対して杉村はこれだけ訓練すれば教示の効果ではなく訓練の効果であると意見を述べたが、これに対しては十分な回答がなされなかった。

藤田(203)は記銘時の分類訓練が群化と再生に及ぼす効果について高頻度語と低頻度語を用いて比較検討した。森より Dallet の指標をどうして用いたかという質問があり、藤田は再生数が多くなると群化量も多くなるといふ欠点があるので今後再検討する必要があると答えた。末利(京教大)は高頻度・統制群の群化量が第三試行で多いのは何か原因があるのかという質問をした。これに対して高頻度語は概念カテゴリーとの結びつきが強いので、特別訓練しなくても試行の過程で自発的にカテゴリーに体制化するようになったと思うという回答がなされた。

宮崎(204) 富永(205) 森ら(206)はランダム提示、ブロック提示法、予備訓練・ランダム提示法を用いて幼児における記憶の体制化過程の分析をした「大島よりメジャーとして MRR を用いた理由について質問があり、森は MRR はチャンスレベルの考慮がされていないが、これまでの研究で ARC や他のメジャーと相関が高いということがわかっているため用いたと答えた。杉村は材料の基準はどのようにして決定したかという質問をした。これに対してこれまで幼児の基準がなかったのが大人の基準を参考にし、幼児にとってファミリーな材料を用いたと回答された。さらに杉村は分類テストの成績と体制化の程度との関係はみていないかという質問をした。これに対して十分な検討を加えていないが参考までに示したと説明があった。山下(東京家政大)より IQ のコントロールは?という質問がなされた。これに対して IQ のコントロールはしていないという回答があった。末利はブロック提示の場合、3才児の再生語数が第四試行目で少ないのは実験条件というよりも達成動機の方が影響しているのではないかという質問をした。これに対して四試行目になると3才児は集中できない場合が多くなっていく。従って試行が長い場合には問題になっていくという回答がなされた。

堀端の研究(207)は多くの(122人)の未熟児を調査対象として同一対象を7年間に亘って追跡調査した貴重な発表であった。小学校2年生時の学業成績・体格・運動能力の調査で未熟児には学業成績の良好なものが多く、体格・運動能力ではやや全体的に劣る傾向を示したという結果を報告した。小学校2年生の段階

での体格(身長・体重), 運動能力(30 m 走・走り巾跳び・ソフトボール投げ)の遅退は肯定できる点であるが, 学業成績の良好なものが多い点は常識に反するところであった。掘端も学業成績の良好群に比較的に体位運動能力の良好なものが多いことを指摘している。7才頃までの幼少児では身体的・知的・社会的発達は互に関連しながら発達し密接な関係のあることが予想されるので, この研究結果には多くの質問がなされた。例えば, 未熟児の原因・在胎期間に比べての体重, 医学的異状のチェック等が必要ではないか(奥平)等があり, 発表者も未熟児の選び方に問題のあることを認めた。

山下等の研究(208)は5才児について昭和40年から49年の10年間体格運動能力について測定し, 戦前戦中の水準と比較考察を試みた。長期間にわたる日本の幼児の身体の形態・機能面の資料から現状を評価する貴重なものであった。研究はM 幼児園の5才児について児童母性研究会の幼児体力検査(疾走・立巾跳び・ボール投げ・懸垂・荷重疾走・片脚跳び)を10年間実施した結果の分析である。結果は最近強調されている如く, 彼等の体位は顕著に向上しているが, 運動能力はむしろ低下していることを示した。特に疾患・荷重疾走・ボール投げでその成績がここ数年間低下の

傾向にあることを指摘した。図1~図6によるとどの種目も平均値が年次によりかなり大巾に変動している。この傾向は片脚跳び, 懸垂で特に顕著であった。達成動機が成績に影きょうすると思われる種目で変動が大きく表われている。幼児の検査ではその信頼強が問題になると推測される。この点で運動能力の年次的変動の原因に関する質問が多くなされた。

末利(209)は幼児・児童の運動調整能力の指標として踵・膝・腰・上体・上肢等の運動反応の統合性をみるために80 cm・60 cmの台上から降下軟着地させた場合の着地ショックの緩衝能力の発達について発表した。この測定は4・5才児段階の幼児でも信頼強が高く(0.8), 運動調整力の指標として適切なものであることを報告した。結果は4才~8才の幼少時にこの面の能力が頻著に発達することを示した。幼少の児童では筋力やパワーの発現よりも発現の調整の機会を多く含む遊びの必要について述べた。すなわち, 運動に関する感覚・知覚情報を統合して反応するような運動を保育の中に組込む必要性について述べた。207~209は幼児の運動能を扱った研究であり, 幼児の全体的発達における身体運動のもつ教育的意味について, 会員の関心の高まることが期待された。

(末利 博・宮崎正明)

発 達 (210~217)

- | | |
|--------------------------|---|
| 座長 西 谷 さやか・吉 村 たづ子 | 千葉大学 三 浦 香 苗 |
| 210 幼児の集合の比較操作に関する関係 | 215 幼児の「多い」「少ない」の理解について |
| 常葉女子短期大学 町 田 イ ク | 追手門学院大学 落 合 正 行 |
| 211 幼児の生活と発達に関する調査 (3) | 大坂市立大学 湯 川 良 三 |
| 一 集合の分配と同等判断における比較行為の分析一 | 216 幼児の言語表現における Spontaneous Responses の発達 |
| 東京教育大学 田 代 康 子 | 一 保存研究の方法的側面一 |
| ” 山 下 直 治 | 聖和女子大学 武 田 俊 昭 |
| 212 3歳児における多少等判断 | 217 幼児におけるたし算の方略 |
| 大 内 正 子 | 東京女子大学 吉 村 たづ子 |
| 天 野 るつ子 | |
| 213 幼児の数概念について I | I 発表と討論の経過 |
| 一 用語をどう認識しているか一 | 上記8つの発表は何れも幼児の数量概念や操作に関 |
| 千葉大学 三 浦 香 苗 | 係している。異なる刺激配置の下で多少等判断を求め |
| 玉川大学 西 谷 さやか | たものでは, 町田(210)は如何なる比較操作がなされる |
| 214 幼児の数概念について II | かを検討し, 大内・天野(212)は言語理解を確認した |
| 一 計数と集合数の関係の理解一 | 上で3歳児について調べ, 田代・山下(211)は液量・ |
| 玉川大学 西 谷 さやか | 粘土量を用いて分配・同等の二過程での反応型を分析 |